田安宗武考（その一）

―文芸論を中心として―

高浜　充

徳川幕府八代将軍吉宗の第二子で、松平定信の父の田安宗武が、幕府枢要の地位にあったのみならず、歌人としても歴史的に偉大な存在である事は、既に周知の事実であるが、彼は学者としても又文芸評論家としても注目すべき業績を残しているのである。歌人としての宗武が世に知られるに至ったのは、明治三十一年に佐佐木信綱編続日本歌学全書に、宗武の歌集『天降言』が収載され、続いて正岡子規が口を極めて之を推奨した事に初まる。子規は墨汁一滴に、万葉以後に於て歌人四人を得たり。源実朝徳川宗武井手曙覧平賀元義是れなり。と言って、宗武の歌が万葉集の骨髄を得たものであると絶讃してから、万葉調歌人としての宗武の存在が、世に広く認められるに至ったのである。万葉集が出た後、近世の中期に至って初めて宗武が、万葉歌風の本質を体得した作品を示した事は、和歌の歴史的展開の上に於て注目すべき事実である。又国歌八論に関する文芸評論の焦点に立った宗武の歌論についても、各方面から諸家によって研究論述されて来たのである。その後昭和十七年から廿一年に至る間に、土岐善麿著『田安宗武』四冊が出て、宗武の未刊の著書作品の殆ど全部が調査紹介された。

ここでは、宗武の歌論ならびに古典文芸評論の本質と短歌作品の特質、ならびにその基盤をなす所の彼の文芸乃至社会に関する理念について再検討して、文芸人としての宗武、近世の時代人としての宗武について考察してみたいと思う。

一

田安宗武が享保十六年十七才の年、江戸城田安門の新邸に移った時、父の吉宗将軍が宗武に与えた書籍の目録を見ると、その大部分が漢籍である。漢籍は四書集註等の経書を初め、老荘等の諸子、史記漢書等の史書、楚辞李杜等の詩文集、説文等の字書、その他医書雑書に至るまで各般の漢籍を網羅してある。当時の知識人の教養は

漢籍から得られたものである事は当然のことであるが、宗武の場合も若年の頃から朱子学による儒学が、その学問の中心となっていたことがわかる。

尚当時の幕府における学問の最高指導者は皆朱子学者であって、吉宗将軍時代には、室鳩巣が儒官となっていたし、宗武は十二才の少年時代から、新井白石門下の土肥元成が、その侍講となっているので、宗武が朱子学による教養を与えられた事は明らかである。右に述べた書籍目録の中には、漢籍の外に少数の和書があるが、之は日本紀大鏡東鑑太平記平家物語等の歴史関係の古典が主で、文学書は万葉集、和漢朗詠集だけである。歌学以外の文学書は、当時の庶民文学と同様に婦女子の愛翫物であって、武家の教養書とすべきでないが、和歌だけは高級な趣味の文学であると考えられていたのであろう。

此の書籍目録の示すものだけが、宗武の学問の全部であると即断することは出来ない。この他に宗武自身が進んで広く色々の古書を見て学んだということは、当然考えられることであるが、彼の若年の頃いわゆる家庭教育的に与えられた教養は、およそかようなものであっただろうという事は、うかがい知られるのである。当時の武家が一般にそうであった様に、儒学的、特に朱子学的教養が、宗武の人生観倫理観の基盤となって滲透していた事は言うまでもないことである。

寛保三年宗武二十九才の時、『誨蒙近言』と称して、近臣に対して処世の指標とすべき訓戒の文を示したものがある。その一節に、

其人の道といふは五倫也。五倫とは父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、是也。(中略)それ士己の職を行ふとならばその身を修むべし。其身修る時は家とゝのふ。しかふして諸侯に仕て国政をとる時は国治り、天子国王に仕て天下の政務をとるときは天下平になる也。其身を修んと欲する時は先心を正す。心を正せんと欲するときは先意を誠にすべし。意を誠にせんとならば知る事を致し、物に格るべし。(土岐善麿著田安宗武第二冊二七頁)

之は大学の文を殆どそのまま引用して、近臣に学問を勧めたのであるが、その訓み方は朱子の註に従って読んでいる点からも、彼の学問が朱子学である事は明らかである。

学問の目的と道徳政治の根本精神とは共通のものであるという儒学的理念が、ここに見られるのである。而して高級なる第一芸術である所の歌道も亦、この意味における学問と共通の目的を有するものでなければならない。したがって歌道と道徳と政治とは、共通の理念を基盤としなければならないと言う彼の信念は、ここから生れてきたものと考えることが出来るのである。

二

寛保二年宗武は(二八才)荷田在満に命じて和歌に関する意見を具申させた。これが国歌八論であるが、之に対して宗武は早速、国歌八論余言を書いて批判した。これから真渕を加えて国歌八論の論争が初まるのであるが、これらの論述によって、宗武の和歌に関する考え方がはっきり示されている。

国歌八論の翫歌論擇詞論に於て、在満が和歌は政治にも人生にも役に立たないから貴ぶべきではない。詞花言葉を翫んで楽しめばよいと論じたのに対して、宗武は国歌八論余言に於て、

うるはしき歌は人のたすけとなり、あしき歌は人をそこなふ。されど又あしき歌をもてこれはあしと思ひて見るときはまた誠ともなるなり。されば雅楽すたれて後も聖なほ詩経といふふみを撰ばせ給ひて人を導きたまふなり。（日本歌学大系第七巻九九頁）

と言って、和歌が道義の昂揚に役立つことを強調している。孔子が詩経を撰んで教化の具にした例を引いて、漢詩が人民教導に有用であると同じ様に、和歌も道徳的教養に効果があると考えたのである。

彼は又更に進んで、和歌の盛衰と政治の隆替とは時代的に一致している。而して古代ほど歌道も政道も栄えたが、後世に至るに従って衰えたと言っている。歌体約言の序に、

世の盛なりけるほどは歌のさまもまた盛なりける。古今集えらばれし頃よりは少しあさはかなるものいできにけり。（中略）俊成定家といへる人のものせられし頃はをさをさ世も乱れてうたの風情もいよいよあさましくぞなりゆきける。（日本歌学大系七巻一六二頁）

又国歌八論余言には

政正しき御代は歌の理さかんなるべく政衰ふる御代は歌の理も違ひぬべし。（同上一〇三頁）

この考え方は、荷田在満の和歌を政教と分離する考え方と根本から相反するものであって、宗武も在満も絶対に容認出来ないものであった。在満は権門の主君に対して、その意を迎える事をせずして、あくまで自説を主張して枉げなかったが、宗武も亦終には『大本すでにたがひぬれば口舌の争ふべきにあらず。』とまで極言するに至ったのである。文芸としての和歌の価値および目的を、政治道徳に対する利用価値によって決定しようとする宗武の理念は、上述した様に儒学的教養に基づく事は勿論であるが、その外に宗武の置かれた社会的位置ということも、見逃してはならない事である。宗武は直接に幕政に責任を持つ役職にはついていなかったけれど、将軍家一族の中でも最も親近な血族として、徳川幕制護持という重大責任は、彼の人生観、世界観のすべてを決定する紐帯であった。彼は意識的にも又無意識的にも、幕府政治の秩序を維持しその興隆を図ることが宿命的な使命であった。学問も文芸もその枠の中においてのみその意義が認められるものであった。武家の嗜として、高級文芸として、世も人もおのれ自身も考えている所の歌道が、棋や絵草子の類と同じ様な消閑の具と考えることは、どうしても我慢できない事であったにちがいない。

政治の興隆を図るためには人民の道義を確立しなければならない。和歌は政治道徳に効用があるが故に、人生的、国家的価値のある文芸であって、貴ぶべき嗜であるという理念は、宗武が置かれた社会的位置が基盤となって生れたものであって、それに儒学的朱子学的文芸観を以て理論づけたものだと言うことが出来るであろう。

三

次に、和歌を政教的効用によって評価する宗武の立場は、更に進んで和歌以外の古文学に対しても亦、道義的解釈を加えるに至っているのである。

賀茂真渕が伊勢物語古意を書いて、宗武に献上したのが宝暦三年頃と思われるが、その後宗武は伊勢物語に私注を施したので、之はおよそ彼の三十九才頃かと思われる。その中で伊勢物語の部分的説話について、宗武は道義的解釈を加えているのが諸処に見られる。その一例を示せば、伊勢物語二十一段の女が男の心を信じないで家出して、後で後悔して歌の贈答をした話について、

此一条は若き夫婦のよく見るべき也。（中略）女も男のあらきことばなど言ひつともうらむ心なく、たゞ男に従がはんことをせちに思ふべし。従ひだにすれば男はおのづからうつくしむものなり。（土岐善麿田安宗武第二冊二〇〇頁）

と批評している。その倫理思想は儒教の五倫の夫婦有別の道徳観である。又二十三段の筒井筒の物語に対しては、

此一条人の妻たらん女は殊に心とどめて見るべき也。大和なる女も高安なる女も夫をしたふの深さは勝劣なけれど、大和のは実をもて思ひ、高安のは色をもて思ふなれば、つゐには夫にそのけじめ知られたるなり。妻の耻は夫の耻なれば、留守の程とてとり乱してあらんや。かへりて男の家にある程はまめやかにするからにつくらふ間なきこともあるべし。留守の程は心のどやかにつくろひかたく守りて居らんぞうべなるわざなれ。げに人の心ざまは見えざる処に見え、聞えざる処に聞ゆるものなれば、只おのれをつつしむにはしかず。（全上二〇五頁）

と批評している。之も誠実を以て夫に仕える婦徳を称讃し、且つ『大学』の慎独の思想を以て物語を道義的に批評したのである。

宗武は又『古事記詳説』を書いて、古事記全体の詳密な訓読を記しているが、その別記の中に、神話伝説に対する道義的、政治的解釈を記した部分がある。別記巻第一『天斎殿に閉居の御事』の中に、

天照大神の天斎屋（あめのいはや）に閉居（こもり）いませしを謹み考ふるに、須佐之男命を恐（かしこ）み給ふにあらず。（中略）御兄弟のよしをもてなだめ置かれ、今かゝることに及びぬれば、偏に御自らの御科（みとが）とおぼして、后を辞して閉居らせ給ふなり。真に聖にてましけり。（全第三冊三九一頁）

と記して、神話中の神を現実的人物として、常識的道義観を以て解釈評論している。

宗武の人生観は現実肯定であり、常識的であり、明朗進取的である。したがって老荘思想や隠遁趣味および仏教的無常観は容認できない思想であった。宗武の『徒然草評論』は、何才頃の著作か不明であるが、徒然草の各段に対して一々論評を加えている。まず冒頭の文に対しては、

この草子はもはら世にときめける人に、おのが才を知らすべきよすがにやつくりけむ。されどあらはにいへばまたかしこき方もありぬべき故にや、書きまぎらはしたる所もあり。また人々の心にあはせむ料にやうやうに書きなせる所もあめる。かゝればこの草子の心いとも定まらざるなり。人のあざけりなむことを恐れて、はやう自ら心ぐるほしけれと言ひけめ。げにこの詞にて多くの人をあざむきけらし。（中略）はたおのれが文学詩歌管絃有職公事

にも達したりとしらせたるなり。将軍の用ひたまはゞつかへんとなるべし。（全第二冊三六三頁）

と言って、兼好は自分の学問を人に吹聴して就職運動をしているのだと、まことに処世的俗世間的常識を以て、作者の心理を推察して罵っている。又世におもねるために筆を枉げて書いたので、豫防線を張って、物ぐるほしけれと書いたのだと非難している。老荘思想や仏教的無常観を書き連ねてある徒然草に対しては、冒頭から理解しようともせず、作者兼好に対しても、有害無用の文人として排斥しているのである。徒然草十八段の『人は己をつづまやかにし、おごりをしりぞけて、たからを持たず世を貪らざらむぞいみじかるべき云々』の文に対しては、

此段あやしうことなることを言ひて人の心をまどはし、我を常人にあらずと思はせむと書きたるにや。されど心ある人は笑ひてむ。（中略）唐の人はあやしきことを好めばかゝる事をもをかしと思ひても興ずめれど、この国はすなほなるに、かゝるえせ者もきこえず。（全第二冊三七七頁）

と記して、老荘思想に基づく隠遁者讃美の兼好の文に対して、我が国は支那と違って、すなおな思想の国であるから、こんなばかげた考の者はない筈だとこきおろしている。俗世間に交る事を、埃にまみれる汚濁の生活と考える事は、以ての外の悪趣味であって、己の才能に応じて世のために働かねばならないという現実的人生観を堅持していたのである。又徒然草の第十段の『家居のつきづきしくあらまほしきこそ仮の宿りとは思へど興あるものなれ云々』の簡易生活や無常観を述べた文に対しては、

此段おもしろく書きたり。但しかりの宿りとは思へどと言ひたる、ことわりすぎてうるさし。はたこと様にほこりかなる住居を書きたる末に、見るめもくるしくいとわびしと言ひてこと足りたるを、さてもやはながらへすむべき、また時の間の煙ともなりなむとぞうち見るより思はるゝ。と言ひたるにてかへりてあさはかになりにけり。わが本意のごと言ひもてゆかば法師めかぬものから、言ひまぎらはさむとてかゝることは加えたるにやあらむ。（全三七三頁）

と言って、兼好が身分相応の趣味のある住居がよいと言ったのに対しては賛成しながら、それに附け加えた無常思想に対して、ひどく罵倒している。現実的人生観の宗武にとって、兼好の徒然草に示された老荘思想や無常観は、氷炭相容れないものであった事は明らかである。

尚又、当時世にもてはやされていた古典たる徒然草に対して、徹底的非難を加えた宗武の態度は、彼の人生観、倫理観ならびにそれに基づく文芸観が、強固な自覚と信念に支えられていたことを示すものである。そうしてその信念は、単に儒学的教養から来ただけのものではなくして、彼の置かれた社会的位置から来た自覚にもとづくものであったのである。徳川幕制の護持と興隆のためには、現実的世界観を以て、人民大衆を教導することが絶対に必要であったのである。しかもそれは、彼にとっては、意に反して強弁する牽強附会の論理ではなくて、穏健中正にして良識的世界観として確信に満ちたものであったと思われるのである。

四

以上、宗武が古事記神話、平安朝物語、中世随筆等の古典文学に対して、道義的乃至現実的人生観を以て解釈批判している実例について検討したのであるが、この他に宗武が古典文学について、その独立的文芸価値を認めたと思われる様な徴証がある事は注目すべきことである。

宗武の伊勢物語註巻一の冒頭に、大意として次の様に記している。

此物語は善を勧め悪を戒むる為にもあらず、人を賞譏（ほめそし）らんとてにもあらず。事を伝へむとてにもあらず。ただ辞を巧にあやどれるをかしみに書るのみ也。されば何となく文をあじはへて、條々をべちに見るべし。（全第二冊一五一頁）

伊勢物語の中の各段の物語の個別的評論に於ては、既に述べた様に道義的解釈をしているが、伊勢物語全体に対しては、右の引用文の示す様に、この書が勧善懲悪のためでもなく、歴史的記録でもなくして、文飾の美しさを味うためのものであると言っているのである。之は彼が頑強に反対排斥した荷田在満の翫歌論の考え方と同じではないか。古典に対しては相当深く研究し、一家の見識を持っていた宗武は、伊勢物語についても、偏狭な一面的解釈にのみ甘んずる程の殿様学者でなかった事は明らかである。伊勢物語が単なる政教文芸一致論のみで解決出来ない事は、宗武も充分理解していたものと思われる。

然らば和歌に於ては翫歌論を斥け、物語に対しては政教に関係なき独自的鑑賞を認めたのは、何故であろうか。彼は物語と和歌との間には一線を画していたのだろうと思われる。物語は古典であるから、当時の絵草子や読本などと全然同種のものとは思われないまでも、慰み草にする読み物であるという点で共通の性質を有するものであるが、歌道は漢学史学有職故実の学問と同様に、士たるものの教養を培うものであるから、一段高級有用な文芸であるという考え方に基づくものと思われる。かような考え方は当時の社会一般に広く行われていた常識だった様であるが、宗武の現実的世界観は、世間一般の常識を受け容れる事に、抵抗を感じなかったものと思われるのである。

五

かような道義的文芸論に対して、理論的体系を備えるための論拠として、宗武は『理』の学説を樹てたのである。そこで此の理の本質について検討してみることにしよう。

宗武は国歌八論余言に、

諸々の道みな理と事（わざ）との侍るなり。歌の道もまた然り。（日本歌学大系七巻九九頁）

又国歌論臆説剰言に、

すべてのことわざ必ず理を本とすれば、わざは是に隨ふものなるを、もしわざを本とせんには必ず理は違ふべし。（全一三五頁）

と言って、天地自然社会人生のすべてにわたって、理と事とがあって、理が根本で事はその従であると述べている。而して『理』は『

ことわり』とも書き、『事』は『わざ』とも記している。更に国歌八論余言には、

実の歌学といへるは歌の理にかなはんやうを学ぶをぞいふべき。さるをたゞその事（わざ）をのみ学ぶを歌学となんいふこと違ひぬめり。（中略）嘗て歌よむこと能はぬにても、心のさまだに歌の理にかなひぬべくばそれぞうらやましかるべき。（仝一〇二頁）

と言って、歌学とは理にかなった歌を作ることを学ぶことであって、わざを学ぶのではないとしている。即ち和歌の本質は、理にかなうと言うことだと考えたのである。

宗武の言うこの『理――ことわり』とは如何なる内容の語であるか、又その学説のもとづく処はどこにあるのかと言う点について検討してみたいと思う。

宗武は『歌論』の中に次の様に述べている。

それ陰陽の消長日月の往来を始として天地の間万物皆その理あらざるなし。（中略）有レ物必有レ則と見えし則とは理也性也命也。（仝一六〇頁）

之は中庸の朱子註の中の次の文と符合する。

性即理也。天以二陰陽五行一化二生万物一。気以成レ形而理亦賦焉。猶二命令一也。於レ是人物之生、因二各得二其所レ賦之理一、以為二健順五常之徳一。所レ謂性也。（中庸章句）

之によって、宗武の言う理とは、朱子学で言う理の理念を歌論に演繹したものだという事がわかる。したがって理とは、万物に遍在するもので、人について言えば本然の性となり道心となる。天地自然について言えば、山川草木のたゝずまい、春夏秋冬のうつりかわりを初めとして、自然の本然の姿は総て理である。更に人について言えば、偽らず巧まず素直な心の姿は理にかなったものだと言う考え方も生れてくるのである。

次にこの『ことわり』と言う語の我が国における用語例について考えてみると、

世の中の常のことわりかくさまになりきにけらしすゑし種から（万葉集巻十五中臣宅守）

ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂もかはる光に（新古今集巻四俊成女）

かように古くから用いられた語であって、何れも道理、当然の條理という様な意味に使われている。隨って理とことわりは一応同義語と考えることが出来る。

次に歌論における用語として、理の語を使用したのは、宗武が最初ではなくて、以前から使用されている。俊成の慈鎮和尚自歌合跋にも、

おほかた歌は必ずしもをかしきよしをいひ、事のことわりを言ひきらむとせざれども云々（日本歌学大系第二巻三〇二頁）

と、ことわりの語が見えるし、この他長明無名抄等にも使用されているが、近くは細川幽斎（慶長十五年歿）の聞書全書に、

よのつねの人の言葉も理はありといへども、程拍子わろければことわり聞えず。かりそめの文章などにもかくのごとし。（日本歌学大系六巻、八四頁）

烏丸資慶（寛文九年歿）の資慶卿口授には、

歌はわづか三十一字の中に道理（ことわり）をたつるものなれば無用の字を置かぬが作者の粉骨なり。（仝二五九頁）

この他にも、宗武以前の古人の書の中に、理の語は屢用いられている。宗武は朱子学および我が国の古歌人の用語例によって、理とことわりと言う用語を採って、その中に独自の文芸的理念を加える事によって、『ことわりとわざ』と言う学説を樹てたものと思われる。

それでは彼の言う理の特質は如何なるものであったかについて検討してみよう。宗武の言う理は古来の用語例の様に道理という意味をも含むのであるが、更に推し広めて、実情実景を巧まず偽らず安らかに表現すること、即ち自然の理を素直に表現するという意味を包含している事に留意しなければならない。この点に宗武歌論の特質が見られるのである。

国歌論臆説剰言に於て、吉野行幸に供奉して人麿の詠んだ『見れどあかぬよしのの河のとこなめのたゆることなくまたかへり見む』と言う歌について、宗武は、吉野行幸を度々行えば国民に迷惑をかけるから、程々になさったがよいと言う諫言の意を諷したもので、『理深くぞおぼゆる』と批評している。之は理の語を宗武が道義的政治的道理の意味に使用したのであるが、かような例は寧ろ少くて、自然の実情という意味に使用した用語例の方が多いのである。例えば臆説剰言に、

さて教とすべき歌は安らかなる歌が、あるは理をふくみあるはおのづから事をのべて、わづかだに理に違はざるなどの歌なり。（日本歌学大系七巻一四一頁）

やまと歌ははかなく言ひ出でしやうなる中に理のこもりたるぞめでたき。さるをあながちに理を言ひつめたるは、彼の検非違使のゆるぎ出でてものたいすらんやうになりて、かへりて人の心を和ぐべからず。（仝一四〇頁）

又歌体約言に、

それ歌は人の心をたねとしてよみ出づるものなれば、わが心につくろひたることなく、すら〳〵とよみ出すべし。しかればすなほなる人は歌の心もすなほに、あるは頑にあるは奸（たは）れたるは、歌にもその色のあらはるゝなり。（仝一六三頁）

自然に安らかにありのまゝの実情を述べるのが理にかなうのだと言うのが宗武の考である。宗武は和歌は政治道徳に効果あるものでなければならないと考えたけれど、直接に訓諭の意を表した歌のみが効用ある歌だと考えていたわけではない。安らかにありのまゝに自然の理を表現した歌がよい歌だと考えていたのである。

それは、彼の古歌の批評等にもはっきり示されている。臆説剰言の中に、持統天皇の『春すぎて夏来たるらし云々』の歌、赤人の『田子の浦ゆ云々』の歌、実朝の『箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ』の歌などを批評して、

これらさせるいましめとなりぬべきにはあらねど、つゆほども理にたがひたる事あらで自然の景色をのべたれば、人の心を和ぐべく、（仝一四二頁）

と言って、実景の写実的表現を、理にかなっているから人の心を和げて人生に有益であると賞めているのである。

又その反対の場合例えば、定家の『駒とめて袖うち拂ふかげもなし

佐野のわたりの雪の夕暮』の歌の様に、苦しい雪景色を美化して表現したものを、『かく苦しきことをおもしろきやうによみ侍ることおほきなる人の害ともなり侍りぬべき』（歌体約言）と言って、実景実情を直敍しないで、作為的に表現することを、人生に有害な歌だと斥けているのである。

六

実情の安らかな表現という意味の『理』を、宗武は古代歌集の万葉集によって発見した。

そして宗武はこう考えた。ことわりを忘れ、わざを重んずる様になったのは、古今集に初まり、新古今集に至って極端になった。だから和歌は後世に至るに隨って衰微の一途を辿って来たのである。それはちょうど政治が世と共に衰頽して来た事と軌を一にしている。現今は權現様お示しによって世は興隆に向かっているのに、歌道だけは後世の風であるのは歎かわしい限りである。歌道を万葉の古風に復して、文化の興隆、延いては政治道徳の昂揚と徳川幕府の繁栄を図らねばならない。宗武はこの様に確信していたのである。歌体約言の序に、

我君の遠つ御祖の神々、世の中を治めさせ給ひて、四つの海の波立たず、民も戸ざしを忘れて、まことに世の勢も古にかへりけり。されどいかなるにか、歌のみ乱れたる世のまゝなる風なるぞなげかしき、（全一六二頁）

したがって『臣がまなぶこゝろは専ら人麿、赤人の風情をたふとむ』（歌体約言）と堂々と宣言したのである。

右の様な宗武の理念は、彼の実作の上にも、又古歌の鑑賞批評の上にも、矛盾する事なく明らかに示されている。

賀茂眞淵の百人一首古説に対して、宗武が私注を加えて評論した『小倉百首童蒙訓』によって、宗武の古歌に対する見解を見てみよう

貞信公の『小倉山峯のもみぢ葉心あらば今ひとたびの御幸またなむ』に対して、

此比の歌にかばかり安らかにしらべめでたきは稀也。（土岐善麿田安宗武第二冊三〇九頁）

法性寺入道の『わたの原こぎ出て見れば久方の雲居にまがふ沖の白波』に対しては、

此比の歌にはいと安らかにてよし。（全三四三頁）

と言って、知巧のあとの見えない写実的歌を賞めているし、この他にも

曲もなく安らかなり
曲もなく聞きよし
甚だしき曲なり

等の批評語が屢々見られる。安らかに技巧のない歌を賞め、その反対を『曲がある』と言って斥けている。文屋康秀の『吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらん』の歌について、

吹くからにの歌はめづらかによまむとのみ思ひてしゐてよみたれば、つづけがらもあしきなり。されば趣向はうかむまゝにてしらべをとゝのへむことを思ふべき也。めづらかにと志してはしらべもかたくなになるなり。（全三〇五頁）

と言って趣向ある歌を斥けている。又、赤人の『田子の浦に』の歌について、万葉集の原作を改作して百人一首に出したのは、後世風の悪い考だと非難している。その他、縁語掛詞等についても、後世の歌の技巧的で悪い例だとして排斥している。和歌の用語も古代の語は優れているが、後世に至って鄙しくなったので、古語を用いねばならぬと、屢〻主張している。

これらの徴証によって知られる様に、宗武の歌論における『理』の本質は、事象の本然の姿を素直に表現する事にあった。彼はその具体的作品を万葉集によって発見したのである。と同時に彼は萬葉歌風の真髄を体得してそれを自分の創作態度として確立する事が出来たのである。

尚右の安らかな表現と言う歌論は、必ずしも宗武が初めて提唱した事とは限らない。定家の毎月抄には、秀逸な歌について、『詞なべてつづけがたきが、しかもやすらかにきこゆるやうにて云々』とある様に、やすらかな詞という用語例が見られる。又堂上歌学に於ても、類似の説が唱えられていることは留意すべきことである。その一例を挙げれば、烏丸光廣が細川幽斎の歌論を、慶長三年から七年に亘って聞書した『耳底記』によれば、

風情をもとめすごすなり。まづさらりとよむべし。さて自然に風情をもとめよむべきなり。（中略）まづたけたかくすなほによみ習ふべし。（日本歌学大系六巻一六六頁）

とあるし、この他にも堂上歌学の歌論には、かような語が見られる。

宗武は若年の頃堂上歌人の指導を受けたので、二条家歌学におけるこの様な歌論に接し、その影響をうけたかどうかわからないが、何れにしても、堂上歌人の歌論は二条家伝来の平淡味の歌風を尚ぶ意味の『さらりとしたすなほな表現』である。それは新勅撰集や為家頓阿の歌風を目標とする意味のものである。宗武は『安らかな表現』を万葉集によって発見した所に、その重大な相違点があるのである。

（以下次号）